マンガUP!新人漫画賞　コミカライズ部門

異世界恋愛短編小説

『囚われ姫の家出』

著：ももよ万葉

【キャラ説明】

■コーデリア　Cordelia　　21歳 王国の第二王女。
ピンクブロンドのふわふわの髪に幼い顔つき。
身長140～145ｃｍくらい
背が低いことがコンプレックス。
背の高い兄（王太子）と姉（隣国の王太子と結婚済）がいる。

■シリル　Cyril　19歳
闇夜のような黒髪。暁の太陽のような金色の瞳。
身長180～185ｃｍくらい。
コーデリアの婚約者。
伯爵家の三男だった。
13歳から騎士養成学校に通い、15歳で近衛騎士団に入団。
19 歳で副団長に就任と同時に侯爵家の養子になり、その功績を認められ、コーデリア姫を下賜された。

■グレース　Grace　18歳
身長165～170ｃｍくらい
つややかな栗色の髪を高い位置でひとつにまとめている。
きりりと姿勢がよくシリルと並んでも見劣りのしない美女。
騎士団長の娘。騎士団の事務官として働いている。

■エドワード
金髪碧眼の他国の王子。
３年前にコーデリアとの縁談が持ち上がったが、密かに用意された見合いの場でコーデリアを迷子の少女と間違える。

【本編】

「厳しい鍛錬に励み、民の尊い命を守る諸君らを私は誇らしく思う！」

私はそう声を張り上げた後、ゆっくりと騎士団員たちの顔を見回した。そして、全員と視線を交わした後、にこりと微笑む。

「全員よくぞ無事に戻った。この後はゆっくりと体を休めるとよい」

整列し胸に手をあてていた騎士団員たちがいっせいに嬉しそうな声を上げた。

彼らは国境を越えてやってきた賊の討伐を終え、王都へ帰って来たばかりの騎士たちだ。

「姫様、どうぞお手を」

「ありがとう」

私はシリルの差し出した手を借りて、階段を下りる。一段。……二段。

地面に下り立ち見上げると、シリルが美しい笑みを浮かべる。私を見下ろして。

団員たちもにこやかにこちらを向いている。私を見下ろして。

そう、私は背が低い。とても。

だから、私が王族として人前に立つ時には、こうして台が用意されるのだ。しかも、ピンクブロンドのふわふわの髪に幼い顔つきのせいで、体格の良い騎士たちに囲まれるとまるで子供のように見えてしまう。

気後れしてしまいそうな心を奮い立たせ、私は胸を張って王族としての務めを果たしてきた。

だけど、それももうすぐおしまい。

「コーデリア様、このままお部屋に戻りますか？」

私をエスコートするシリルがそう尋ねる。私が頷くと、彼は品よく微笑んだ。

シリルは闇夜のような黒髪に暁の太陽のような金色の瞳を持つ美丈夫だ。15 歳の時に首席で騎士学校を卒業し、鳴り物入りで騎士団へ入団。そのまま異例の早さで出世して、19 歳で副団長になった。

そして、この国の第二王女である私の婚約者でもある。

副団長になるにあたり、伯爵家の三男であったシリルは後継のいない侯爵家の養子となった。次期侯爵と副団長の座を自力で勝ち取ったシリルを讃え、父である国王が褒賞として私を下賜、……という名目で、21 歳になっても婚約者のいない私を押し付けたのだ。

結婚して王族でなくなれば、私は彼らにああして声をかけることもなくなる。あの踏み台はもうお役御免だ。

シリルとは幼馴染だった。子供の頃は二つ年上の私の方が背が高かったのに、あっという間に追い抜かれて今では見上げるばかり。今や立派な騎士となった彼は、かくれんぼで一緒に隠れたクローゼットにはもう身の半分も隠すことはできないだろう。

部屋の前まで辿り着くと、シリルは名残惜しそうに私の手をぎゅっと握った。

「送ってくれてありがとう、シリル。このあと良かったら私の部屋でお茶でも」

「副団長！」
　私がシリルに声をかけたと同時に、彼の部下があわてた様子で駆けてきた。
「何だって？」
　部下に何やら耳打ちされたシリルはそうつぶやくと顔をしかめ、私の手をぱっと離した。
「申し訳ありません、コーデリア様。急用がございまして、失礼いたします」
「いいのよ。早く行きなさい」
　シリルは深く礼をすると、部下と共に瞬く間に駆けて行ってしまった。廊下に控えていた侍女たちがささやき合う声が聞こえる。
「シリル様ったらあんなに慌てちゃって」
「どうせまた、グレース様のところに行ったんでしょう」
「王女様の婚約者としての自覚がなさすぎなんじゃないかしら」
　私は空っぽになってしまった手をにぎにぎしながら部屋に入り、静かに扉を閉めた。
　シリルは私の婚約者。国王陛下に私を押し付けられた、かわいそうな婚約者。———彼には他にお似合いの恋人がいるというのに。

　騎士団長の娘であるグレース嬢は、現在事務官として騎士団で働いている。年齢はシリルの一つ下の 18 歳。つややかな栗色の髪を高く結いあげ、姿勢よく立つ姿はすらりとした体躯と相まって、背が高く凛々しいシリルと並ぶのにふさわしい女性だ。
　シリルはきっと彼女と結婚するために副団長の座を目指していたのだろうに。
　私にはけして見せないくだけた態度で彼女と話すシリルの姿を思い出したら、胸がずきんと痛んだ。
「あーあ、何とか婚約解消してあげられないかしら」
　そうつぶやいたら、もっと胸が痛んで目の前がぼやけた。
　婚約が決まってから、私はこのことで頭がいっぱい。でも、王女の最後の公務として毎日ぎっちりとスケジュールを詰め込まれていて、解決策を考える暇がない。こうなったらもう……。
「家出するしかない！」
　カッと目を見開き、私はすぐに机に向かった。そして、引き出しから便箋を取り出してペンを走らせた。
『一人になって少しゆっくり考えたいの。探さないでください』
　なんてことを言ったって、王家の馬車でおばあさまの屋敷に行くつもりなのだ。すぐに見つかってしまうだろう。
　私はペンを置き、立ち上がった。掃き出し窓を開けてベランダに出る。
　強い陽光がまぶしくて、私は目を細めた。さわやかな風に髪がふわふわと舞い、窓ガラスに濃い影を落とす。手すりに両手を置いて、私はぼんやりと空を眺めた。
　私には兄と姉がいる。王太子である兄はゆくゆくは国王に、隣国の王太子の元へ嫁いだ姉

は王妃となる予定だ。
『お兄様とお姉様がお母様のお腹の栄養を全部持って行っちゃったんだわ。だから私の背が小さいままなのよ！』
　背の高い二人が羨ましくって、子供の頃の私はいつもそうわめいて泣いていたっけ。
　くすりと笑って、私は手すりに頬杖をついた。
　私にだって、以前は婚約者候補がいたのだ。
　あれは三年前のこと。
　私は公務で向かった辺境にある都市で、金髪碧眼の美しい青年と出会った。
　彼はとある国の王子、エドワード。これは、たまたまお忍びで旅行を楽しんでいた王子様と、たまたまお忍びで街歩きをしていたお姫様が偶然出会った……という筋書きのお見合い。
　すぐに打ち解けた私たちは束の間の会話を楽しんだ。そして、騎士団の詰め所に到着すると、彼は言った。
「おおい、迷子を連れてきた。保護してやってくれ」
　迷子として手を引かれた私を見て、詰所の騎士たちは顔を青くして、一様に言葉を失っていた。あの中には、顔を歪めるシリルの姿もあったような気がする。
「さて、これから私の姫を探しに行かなければ。親御さんが迎えに来るまでいい子にしているんだよ。じゃあね、かわいいお姫様」
　王子はそう言って私の頭をひと撫でして去って行った。
　もちろんお見合いは大失敗。あの後、真相を知った王子が謝罪に来たけれど、怒りとみじめさで涙が止まらず面会することはできなかった。それは慰めに来たシリルの制服の袖を涙でべちょべちょにしたほどだった。
　あっという間に私のその不名誉な見合い話は国内に広まった上、大柄の騎士に引き渡される私の姿がまるで捕獲された小動物のように見えたせいで、ついたあだ名は『囚われのお姫様』。おかげで、それ以降は婚約の打診もすっかりなくなってしまった。
「お姉様みたいな幸せな結婚をしたかったけれど、私には無理なのよ。どんなに背伸びをしたって……」
　手すりに突っ伏してそうつぶやいたら、部屋の中からバタンと何かが倒れる音がした。部屋を窺ったら、侍女が私の書置きを手に目を見開いている。その傍らでは椅子が倒れていた。
「ひ、姫様が、家出！　誰かー！　大変よー！　姫様がー！」
　侍女はそう叫びながら部屋を飛び出して行ってしまった。
「待って、私はまだここに」
　私は急いで部屋に戻ったけれど、そこにはもう誰もいない。
　そっと廊下に出てみれば、侍女や護衛の騎士たちが「姫様が！」と叫びながら右往左往している。相当あわてているのか、私がいることに誰も気が付かない。
「あの、私はここに……」

私は部屋に戻りしばらく呆然とした後、自分で紅茶を淹れてソファに座った。
灯台下暗し。私はここにいます。
熱い紅茶をすすり、考えた。どうしよう。大変なことになってしまった。
さっさと城を出ればよかった。それにしたって、どうして誰も私に気が付かないの。
それはやっぱり私が小さいから？　視界に入らなかったから？
どんなに胸を張ったって、背筋を伸ばしたって、私みたいなちんちくりんがシリルと並んで立つなんて———。
膝の上でスカートを握りしめて涙を堪える。
開けっ放しだった窓から風が入り込み、レースのカーテンが大きく揺れた。
「窓、閉めなきゃ」
こぼれ落ちそうになっている涙をぬぐい、私は立ち上がった。その時、ベランダの方から、ダンッ！　と大きな音が響いた。
「……シリル！？」
私はあわてて口を押えてソファの陰に隠れた。カーテンの隙間から見えたのは、どこからあらわれたのか、ベランダに勢いよく下り立ったシリルだった。
ここ３階よ！？　と叫びそうになるのを堪えた。あの人いったいどこから来たの！？
彼はこれから戦地に向かうかのような厳しい表情で部屋の中を睨んだ。
それを目にした私は思わず猛ダッシュでクローゼットの中に逃げ込んでしまった。直前まで頭に思い浮かべていた人が突然目の前にあらわれるなんて、どんな顔をしたらいいのか分からない。
私は背伸びをして、クローゼットの扉についた小さな窓から部屋の中を窺った。
ゆっくりと部屋に入って来たシリルは、テーブルの上に置きっぱなしになっていた私の書置きを拾い上げた。そして、ぎゅっとそれを握りしめるとぎりりと歯噛みして言った。
「……許さない、俺から逃げるだなんて。やっぱりすぐに屋敷に連れて行って閉じ込めておくんだった……！」
え。
……えっ？
ちょ、ちょ、ちょ、ちょっと待って。知らない、知らない。シリルのあんな顔知らない。婚約者(わたし)にしか見せない特別な表情、なんてものに憧れてはいたけれど、知りたくなかったわ、あんな顔。
シリルはきょろきょろと室内を見回し、何かを考え込む仕草を見せた。
そして、おもむろに顔を上げると、わき目も振らずに私の隠れているクローゼットに向かって真っすぐに歩いてくる。
なぜだか分からないけれど、すっごくこわい。見つかったら大変なことになりそうな予感がする。逃げたい、でも逃げられない。シリルはなおもずんずんとこちらに向かって歩いて来る。しかも、小窓越しに目が合っているような気がするぅぅ！

シリルが一歩近付くたびに、自分の荒い息遣いと心臓が早鐘を打つ音が耳の奥に響く。
シリルがクローゼットの取っ手に手をかけた。腰が抜けた私はその場に座り込んでしまった。
「見つけた……！」
扉の開く音と同時に聞こえたシリルの震える声。私は思わず、ひぃ、と小さく息を呑んだ。
「コーデリア様！　良かった、ご無事で！」
そう叫んで私を抱きしめたシリルは、先ほどとは全く違う、いつもの優し気な紳士の表情に戻っていた。
良かった、良かった、と唸るようにつぶやいて、シリルは私をぎゅうぎゅうと苦しいほどに抱きしめる。何だかすっかり呆けてしまった私は彼の背中をそっと撫でた。
「ごめんなさい。皆をからかっていたわけでも、騙そうとしていたわけでもないの。もたもたしているうちに先に手紙が見つかってしまって、皆あわてていたから、ここにいるって言い出しにくくなっちゃって……」
「コーデリア様、どうして家出なんて」
シリルが悲し気に顔を歪める。私は口を開いて、息を吸って、また閉じた。シリルの澄んだ金色の瞳が揺れる。
「シリル」絞り出した私の声が震えた。
「今ならまだ、婚約を解消することができるわ」
ひゅっと息を呑む音が聞こえた。目を見開いたシリルから表情が抜け落ちる。
私は手を伸ばして、シリルの頬にそっと触れた。
「愛しているんでしょう？　グレース嬢のこと」
「は？」
シリルがぽかんとする。
「なんでここでグレースが出てくるんですか」
「え？　想い合っているんでしょう？」
「はぁ？　そんなわけないでしょう、冗談でも止めてください」
「だって、最近はずっとあの子と一緒にいるって聞いたわ。彼女と結婚するために頑張って出世したんだって」
私の言葉に、シリルが心底不快そうに顔をしかめる。
「それは誤解です。副団長になってから事務仕事が増えて、やれ経費の申請が大ざっぱすぎるとか、サインは書類の規定の場所に書けとか、あいつ超うるさいんですよ」
「そ、それは当然のことよ、シリル」
身を起こしたシリルは私をしばらく見つめた後、大きな手で自分の口元を押さえて顔をそむけた。
「はあぁ、やっぱり可愛い……」
シリルはそう言うと、名残惜しそうにもう一度私を抱きしめ、そのまま抱えてクローゼッ

トから出した。
「どうして私がここにいるとわかったの？」
「わかりますよ。かくれんぼすると、いつもあなたはクローゼットに俺を引っ張って行ったじゃないですか」
「うっ、は、恥ずかしい……」
　顔が熱い。私は両手で顔を隠した。
「やだ、もう……。体だけじゃなくて中身も子供みたいじゃない……」
　ふ、と吐息交じりの笑い声が聞こえて、私は指の隙間からシリルを見上げた。
「小柄なのをまだ気にしていたんですか。清廉潔白、公明正大とはまさにコーデリア様、あなたのことだ。我々騎士団員を始め誰もが、常に堂々としているあなたのことを尊敬し敬意を払っています」
　そう話すシリルの真摯な瞳に観念して、私は顔を隠していた手を下ろした。それでもやっぱり、こんなに真っすぐに見つめられると恥ずかしくて、つい顔を逸らしてしまう。
「そう言ってくれるのは嬉しいけれど、こんなに小さい私じゃどうせ幸せな結婚なんてできないし」
「まさか。俺が幸せにします」
「だって、ものすごく屈んでもらわないとあなたにキスできないもの」
「えっ！　キスしてくれるんですか！？」
「するんでしょう？　毎日、いってらっしゃい、と、お帰りなさい、のキスをするのが幸せな結婚だって、姉様が言ってたもの」
　私の言葉に、シリルが一瞬ぽかんとした後、まるで子犬のように私に飛びついてきた。すごくでっかいけど。
「しましょう！　キスしましょう！　おはようとおやすみといただきますとごちそうさまといってらっしゃいとこんにちはとごきげんようと」
「多い！　多い！」
　肩を両手で押し返したら、シリルはそのまますとんと床に片膝をついた。そして、右手を胸にあてて、私を見上げる。
「俺がこうして膝をついて愛を乞うのはコーデリア様、あなただけです。どうか俺と結婚してください」
　こうして久しぶりに近くで見下ろしたシリルは、子供の頃と同じように裏表のない誠実な笑みを浮かべているけれど、やっぱりきちんと大人に成長していて、私は妙にどぎまぎしてしまった。
「ま、まあ、そうやっていつも跪(ひざまず)いてくれるんだったら、キ……、ス、できるから、結婚、しても、いいけど？」
　たどたどしくもプロポーズを承諾して微笑んだら、シリルもまたとても嬉しそうに微笑み返した。

　そして、再び飛びついてきた。
「じゃあ、さっそくしましょう！　プロポーズ成功のキス！」
「近い！」
　全力でシリルの顔を押し返していたら、バターン！　と大きな音を立てて、部屋の扉が開いた。
「姫様から離れなさい！　シリル！」
「……チッ」
　部屋に飛び込んできたのは数人の侍女と騎士を引きつれたグレース嬢だった。盛大な舌打ちをしたシリルをグレース嬢がきつく睨む。
「姫様がいなくなったと聞いたら、ベランダを跳び渡って行ってしまって」
「廊下を走るよりも早いだろう」
　シリルはそう言うと、いつの間にかまるで私を人質に取るかのような体勢になっていた。
「姫様を放しなさい！」
「やだね」
「姫様！　逃げてください！　その男は姫様を監禁するつもりです！」
「かんきん？」
　隣にいるシリルを見上げたが、彼はきりりと紳士然とした凛々しい表情をしている。
　グレース嬢がびしっとシリルに指をさす。
「その顔に騙されてはいけません！　シリルは屋敷に外側から鍵をかけられる部屋を作っているんです！」
「シ、シリル？」
「謝罪に来たエドワード王子と姫様を会わせないように画策し、その後は姫様の縁談を全て断るように国王陛下に頼んだのです！」
「そんなことできるの？！」
　私はあわててシリルを見上げた。シリルは一点の曇りもない瞳で私に微笑む。
「最速で出世するから、って国王陛下と約束したんです。すみません、できればコーデリア様が十代のうちに婚約したかったんですけど」
「私に全く縁談が来なかったのは、シリルが……」
　愕然とする私に気付いたグレース嬢が悲し気に眉を下げた。
「私は瞬く間にシリルに外堀を埋められてしまった囚われの姫様を助けたいのです！　これは国を守る騎士団長の娘である私の使命です！」
「俺は陛下との約束を守っただけだろう。コーデリア様は俺のプロポーズを承諾してくれたんだ」
「なんですって！　脅迫されたのですね！　くっ、どんなおそろしい目に合わされたのか、おいたわしい……。皆、シリルを捕縛しなさい！」
「ウワー！　裏切ったな、お前ら！」

瞬く間にシリルは騎士たちに取り囲まれ見えなくなってしまった。
「しっかり縛って！　すぐ姫様のところに行っちゃうんだから」
「離せ！　コーデリア様ぁー！」
シリルが私の名を叫ぶ声。わあわあ、ドタバタと騎士たちがシリルを取り押さえる。
私はそっと騒がしくなった自分の部屋を出た。
「……一人になってゆっくり考えたいわ。やっぱりおばあさまのところへ行こう」
結局この後、シリルに掴まった私はそのまま彼の屋敷へ連れ去られ、結婚式の日まで外に出してもらうことはできず、文字通り囚われのお姫様となってしまったのだった。